

樂吉左衛門氏と私

十五代坂倉新兵衛

私と樂君とは東京藝術大学の同級生で五十年來の友人であり、予備校で初めて出会った。樂焼の息子も来ていると聞いてはいたがクラスが違っていたので、顔は知っているものほとんど話したことがなかった。それが藝大の彫刻科に合格し同級生となった。共に代々続く焼物屋の一人息子で十五代目、後にわりと早くに父が亡くなり家業を継ぐというところも何か良く似た環境であった。彫刻科は全部で二十一人の小人數、それが四年間一緒に学ぶわけで自然と密度の濃い付き合いとなる。

今でも年に一度、一月に東京で同級会を開いている。私は遠いのでたまにしか出席できないが、樂君はちようどその頃表千家の東京初釜があるのでほぼ毎年出席しているようだ。毎回十人余り集まり、この時は俺、お前、の学生時代に戻り昔の思い出話や近況報告などに花を咲かせる。樂君もこの時は多くの方が知っている芸術家・樂吉左衛門ではなく学生時代と変わらない樂君の違う顔が見られる。

そんな話の中で樂君より、同級生でコラボレーションしての展覧会をしようではないかという提案があり、かなりの同級生の賛同が得られ、その後話は具体的になっていった。そして今年九月佐川美術館で開催ということが決まり今各自制作に取り組んでいる。陶芸、彫刻、ガラスといろいろな方向で仕事をしている我々の作品が、影響し合っただのようなコラボレーションができるのか楽しみにしている。

二〇一三年の新年だったか京都で家族同士で食事をしている時、彼から二人で一緒に展覧会をしないかとの誘いを受けた。お互い仕事を取り替えて僕がきみのところで萩茶碗を造るから君はうちで樂茶碗を造り二人でコラボしての展覧会をしよう

というので私もそれは面白いね、是非やろうと話はほとんど進んでいった。

彼は佐川美術館の樂吉左衛門館で毎年「吉左衛門X」という、彼と誰か、もしくは何かという企画展をしており、二〇一五年九月から半年間、私と展覧会をすることになった。また、せつかくの機会なので後に残るよう本を作ろうということになり、萬真智子さんという方にお願ひし『樂と萩 新兵衛の樂・吉左衛門の萩』という本を世界文化社から出していただけることになった。

展覧会の一年半くらい前から実際に仕事に取り掛かり、お互い相手の工房へ行つて作陶した。萩の土は彼にとっても初めての経験でねばりの少ないサクサクした土であるからちよつと力を入れ過ぎるとフチがピリピリ切れやすいのだが、それも彼の感性でうまく生かして造っていた。ただ萩の土は樂焼の土より収縮率が大きいため最初の頃造った茶碗は小さくなり過ぎ、次の時は意識しすぎて大きくなり過ぎたと大ききには苦勞していた。ちなみに私の最初の樂茶碗も大きくなり過ぎ樂の窯にぎりぎり入るくらいであった。一年半の間につごう三度ずつ相手のところに行つて作陶した。

はじめ樂茶碗は手捏ねだから彼は轆轤が引けるのかなと思っていたがなかなか上手で、聞いてみると彼の窯場にも轆轤があるそうで茶碗は造らないけど窯焚きに使うサヤなどの窯道具は自分で造っているとのこと。轆轤がうまく引ける理由が納得できた。ともあれ萩に於いても彼の家に於いても精力的に挑戦していたようだ。

息子の篤人君が父は最近すっかり轆轤にはまっていますよと言っていた。『樂

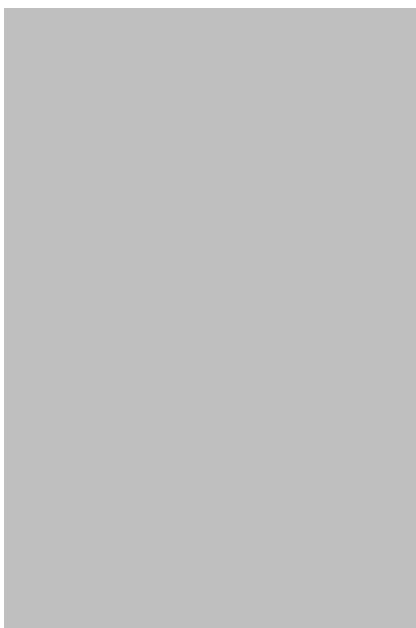


轆轤水引きをする樂吉左衛門

と萩』の本の中で彼が轆轤の回転は幻惑的であり螺旋状の無限回転の中に入っていく快楽はまさに身体舞踊であると表現していた。轆轤主体に仕事をしている私にはなかなか思いつかない発想だが、言われてみれば思考的な樂茶碗造りからすると踊りのような感覚と感ずることもうなずける。彼からすれば踊りを舞っているつもりで轆轤に向かっていたのだろうか。

二〇一三年十一月、黒茶碗の窯焚きに参加させてもらった。黒茶碗は年に二回しか焼かないそうだ。萩の登り窯と違い一碗ずつ焼き上げていく樂の窯での体験は新鮮でありとてもわくわくさせられた。夜中より始まった窯焚きは夕方六時頃まで続いた。まさに映像で見ていたのと同じ緊迫感が辺りに漂い次々と焼き上げていく。手伝いの人は十数人おられただろうか、思っていた以上に多くの人が関わっておられた。私も自分で造った茶碗は引き出させて貰ったが、一碗ずつ引き出すとすぐに上手く焼き上がったかどうかわかる樂焼の窯は、二、三日経たないと窯出しができない萩の窯とはまた違った緊張感がある。篤人君の茶碗が焼き上がる度に父子で眺め合いながら感想を述べあう姿が印象に残っている。

窯焚きは防火服を着ていても思った以上に熱くて風を送るフイゴを吹くのもコツがあるようで私がやっても温度が上がらず息が上がってしまうが、かなり年配の方でも上手に吹いておられた。最後に彼の焼貫の茶碗を焼く段になるとフイゴは体力のある若い人でないと無理なようで、焼貫茶碗の巖を思わせる荒々しさを出すためかなりな高温で焼き上げていることがわかる。



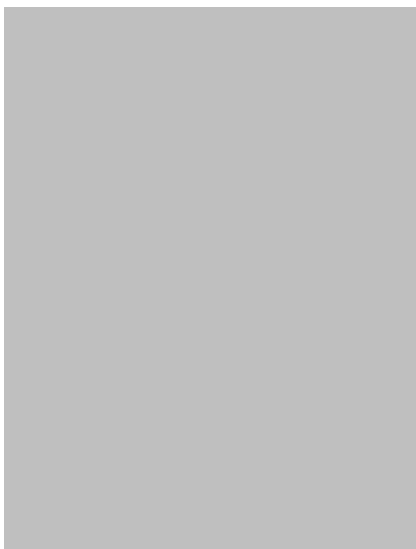
二人それぞれに、茶碗を削る
図版2点ともに『樂と萩 新兵衛の樂・吉左衛門の萩』
(世界文化社、2014年)より

窯焚きが終わった後は親戚の人、友人など手伝って下さった方々とすきやき鍋を囲んでの打ち上げだ。学生時代にお邪魔した時お世話になった樂君の友人の水谷さんは父子で手伝っておられる。他に二組の親子の方がおられた。このようにして窯焚きの技術継承がなされ、四五〇年続く樂家の歴史の一端を担ってこられたのだなと思った。

京都に茶碗造りに行っていた頃の事、彼がエルミタージュ美術館で歴代の展覧会をすることになって昨日ロシアの関係者が来たんだと言っていた。重文の茶碗なども出品する大きな展覧会なので事故などが起きないか心配していると言っていたが、京都国立近代美術館に巡回してきたその「茶碗の中の宇宙 樂家一子相伝の芸術」展を見てあらためて大々的な展覧会であったことが実感され彼のグローバルな活動に驚かされた。会場にずらりと並ぶ長次郎から始まる歴代の樂焼を見ていくと彼の茶碗の革新性が目を引くが、彼のところで作陶させてもらった時の仕事場や窯場の情景が目につく。そこには四五〇年にわたって続いてきた樂家の精神が宿している雰囲気を感じられた。以前彼は、樂茶碗は土と削りの道具があればどこでも造れるが、私にとっては京都のここしか造れない茶碗でもあるというようなことを言っていた。

常に初代を意識しつつそれぞれの時代に向き合いながら新たな創造を模索することが樂家歴代の伝統であるという言葉の感じられる会場であった。

(日本工芸会元理事、山口県指定無形文化財萩焼保持者)



十五代坂倉新兵衛《赤樂茶碗》2014年 個人蔵